

地震沖トラスマ

国内から援助隊出発

「心のケア努めたい」

巨大地震による被害が徐々に判明するなか、国際協力機構（JICA）の国際緊急援助隊の医療チームやNGO（非政府組織）が30日、被災地のインドネシア・ニアス島に向けて動き出した。メンバーの中には前回のスマトラ島沖の巨大地震の際にも派遣された人たちもいる。発生から2日目を迎え、「時間との勝負」と、日本への支援が活発になってきた。――面参照

JICAの医療チームは同日午前、成田空港で結団式を開き、出発した。一行は医師2人、看護師3人、薬剤師1人ら総勢11人。ニアス島で2週間、医療支援にあたる。横浜労災病院の医師庄古知久さん(38)は「建物の倒壊がかなりあり外傷患者が多いだろう。早く診てあげたい」と話した。

JICAは昨年12月26日に発生したスマトラ島沖大地震・津波の際にも7回、延べ約1400人の医療チームを被災各国に派遣した。

今回のメンバーの一人、東京都立川市の災害医療センターに勤める看護師、大澤志保さん(30)は2月に2週間、自衛隊で、スマトラ島北部バン

ダアチエに入った。海岸から車で20分ほど離れた内陸部に民家を借りて、通訳らと共同生活した。街は復興に向かっていった。が、海岸近くに行くくと建物は土台だけが残り、街の中にも崩れた塀や土砂でつぶれた商店など、津波のつめ跡が残っていた。大澤さんは30日未明、出発準備の合間に「今回は地震直後。もっと大変だろうと想像しています」と話した。

現地の人はず度も大きな地震に襲われ、精神的にも大変な衝撃を受けているはず。体だけでなく心のケアにも気を配ってきたい」

国際医療ボランティア「AMDA」（本部・岡山市）も30日、本部職員の大松永一さん(36)をニアス島に派遣した。調整員として、AMDAインドネシア支部の医師団の支援や、医薬品の購入などの任務にあたる予定という。

松永さんは前回のスマトラ島沖地震の直後にも、津波の被害を受けたインドに派遣され、2カ月以上活動した。「前回の経験もあるので、淡々とやるだけだ」と話していたという。

沖震
スマトラ
スマ地

救援隊現地入り

交通寸断、安否確認が難航

【ジャカルタ17日慶達也】インドネシアのスマトラ島西沖で二十八日深夜(日本時間二十九日未明)に起こったマグニチュード(M)8・7の大地震で最大の被災地となったニアス島に、オース

トラリアやシンガポール、マレーシアなど各国の支援チームが三十日、相次いで現地入りし、救援活動を始める。ユドヨノ大統領も一両日中に現地を視察する。(関連記事を社会面に)

オーストラリアは輸送機と艦船を派遣。シンガポール、マレーシアもそれぞれ四十人、二十人の支援チームを送る。日本の国際緊急援助隊も三十日、北スマトラの主要都市メタンに到着し、一両



インドネシアに向かう緊急援助隊(30日午前、成田空港)

日中に現地入りする。米中や欧州各国、中国も次々支援を表明、救援チームを派遣する。インドネシア政府は死

者が千人以上に達する可能性があるとされている。現地では国連の支援チームやインドネシア国軍が救援活動を進めているが、ニアス島の空港が被害を受け、大型機の離着

陸ができない。道路や橋が寸断され、停電や通信事情も悪くなっているため、情報収集や救援活動が難航。災害対策本部に

よる死者確認は三百三十人にとどまっている。島民が家屋の下敷きになっており、犠牲者は拡大する可能性が高い。



MEMBERS OF A JAPANESE medical team prepare to depart from Narita airport Wednesday morning for Indonesia's Nias Island to help people injured in a major earthquake Monday.
KYODO PHOTO

Medical team heads for quake-hit Nias

NARITA, Chiba Pref. (Kyodo) An 11-member medical team headed Wednesday for Indonesia's Nias Island to provide medical assistance to people injured in this week's earthquake.

The team will take part in an international emergency relief mission to help survivors of the magnitude-8.7 quake that was centered off Sumatra Island.

"I'm nervous because Nias Island is more remote than Aceh, where I visited twice this year" for tsunami disaster reconstruction aid, team leader Shigeya Aoyama said in a ceremony at Narita International Airport. "We hope to do our job with good teamwork."

About half of the group, which includes doctors and nurses, worked in Sri Lanka

and other areas affected by the tsunamis that struck the Indian Ocean region on Dec. 26.

The team will head for Nias Island, hardest-hit by the temblor, with surgical and medical supplies, but it may have trouble getting there as there are reports that the runway on the island has been damaged, according to the Japan International Cooperation Agency.



震災・ニアス島

初の赤ちゃん 日本隊もケア

【ニアス島（インドネシア）＝藤本欣也】スマトラ島沖地震最大の被災地、ニアス島のグアンシトリの病院で一日、災害後初めての赤ちゃんが誕生し、医療支援活動を開始した日本の国際緊急援助隊も産後のケアにあたった。

赤ちゃんが産声をあげたのはグアンシトリ最大の医療施設、ルーマサキ病院。母親のリアさん（30）は先月二十八日深夜、地震で家屋が全壊するなか、ひざを負傷しただけで奇跡的に脱出。おなか生まれたばかりの赤ちゃんを抱きしめる母親のリアさん

「（インド）洋大津波の被害を受けた」アチエ州と違い今回の被災地は、孤島なので支援や復旧のスピードが遅い」と語る。国際緊急援助隊は地元から島南部の医療支援を要請されており、現在活動拠点を検討中だ。

を手で覆いながら、丘のほうに逃げたという。三輪タクシー運転手の夫は地震後、休職中で生活のめどはたっていない。この日、生後数時間の赤ちゃんを診察した国際緊急援助隊の医師、庄古知久さん（31）は「いまのところ問題はありません。ただ、水分を少し与えたほうがいいでしょう」と家族にアドバイスした。

国際緊急援助隊のメンバーは医師二人、看護師三人を含む計二十人。一日は同病院で外来患者の診察を手伝った。当初、被災者の右足の切断手術が予定されていたが、停電のため中止された。

青山滋弥団長（50）は

「（インド）洋大津波の被害を受けた」アチエ州と

違い今回の被災地は、孤島なので支援や復旧の

スピードが遅い」と語る。国際緊急援助隊は

地元から島南部の医療支援を要請されており、現在

活動拠点を検討中だ。

【グアンシトリ(インドネシア・ニアス島) 花田吉雄】インドネシア・スマトラ島沖で起きた地震の被災地ニアス島の中心部グアンシトリで1日、日本の国際緊急援助隊(青山滋弥隊長)が医療支援活動を始めた。写真、宮坂永史撮影。

同隊は医師、看護師など10人からなり、この日、再開したルーマサキ総合病院で地震によるけがが人の治療に当たった。

入院患者には、この日朝生まればかりの女の赤ちゃんもいた。母親のリアさん(20)は、自宅の倒壊で両足をけがしたが、親類の家へ避難し、この日の外来で無事出産した。

赤ちゃんの診療に当たった同

医師あるところに命 * ニアス島に援助隊

隊の庄古久医師(横浜労災病院外科・救急医)は「少々脱水症状があるが、赤ちゃんは元気。母乳が出なければ哺乳瓶でミルクを与えよう」とスタッフに話しかけ、応急処置を施した。

看病していた夫のウラさん(20)は「地震の後で不安でいっぱいだったが、妻も子どもも元気でとても良かったと喜んでいたら、病院には電気が通っておらず、レントゲンなどの医療機器が使えず、手術もできない状態が続き、医師の触診が頼りだ。

同隊は地元州政府の要請を受け、医療体制が乏しい島内第2の町、南部テルク・ダラムの病院に拠点を置き、医療活動を行う予定。



(注：スマトラ島内最大の新聞、記事本文中に団員11名全員の名前の記載あり。)



TIM DARI JEPANG : Suasana saat tim kesehatan dari Jepang berkunjung ke kantor "Analisa" dan berbincang dengan Wapemred H Ali Soekardi didampingi Sekretaris Redaksi War Djamil, Senin (11/4).

Penggantian Tim Kesehatan dari Jepang di Nias

Medan, (Analisa)

Tim Kesehatan dari Jepang yang merupakan kelompok pertama, mengakhiri tugas kemanusiaan di Pulau Nias, setelah berada di sana sejak 31 Maret 2005. Begitu ungkap pimpinan tim, Aoyama Shigeya saat bersama anggota tim berkunjung ke Harian "Analisa" yang diterima Wapemred H Ali Soekardi dan Sekretaris Redaksi War Djamil, Senin (11/4).

Selama berada di Pulau Nias, tim mendirikan klinik lapangan di Gunung Sitoli. Sampai 10 April 2005, tim memberikan bantuan pelayanan bagi 1708 pasien untuk berbagai keluhan maupun penyakit.

Menurut Aoyama, di sana tim menyewa sebuah rumah sebagai posko dan untuk kelancaran tugasmelayani pasien, pada saat aliran listrik mati, tim menggunakan generator yang memang bisa dibawa dari Jepang.

Kesan-kesan tim selama di Gunung Sitoli antara lain masyarakat Pulau Nias sangat ramah dan kami sangat terharu dan prihatin dengan kondisi yang menimpa masyarakat akibat gempa

tanggal 28 Maret 2005, ucap Aoyama seraya menambahkan meskipun pada hari pertama tiba di Gunung Sitoli, mereka belum dapat makan nasi karena terbatasnya berbagai fasilitas, namun makan pop-mie sudah sangat menyegarkan fisik kami.

Tim pertama ini berangkat dari Tokio tanggal 30 Maret 2005 dan tiba di Gunung Sitoli pada 31 Maret melalui Medan dengan sponsor JICA dan sebagai pengganti adalah Tim II dengan jumlah personil 17 orang yang melanjutkan tugas kemanusiaan di Pulau Nias, khususnya di bidang pelayanan kesehatan bagi korban gempa.

Tim I terdiri dari 11 orang yaitu Aoyama Shigeya (pimpinan), Ohtomo Yasuhiro (dokter/wakil pimpinan tim), Ono Tatsuo (kordinator), Shoko Tomohisa (dokter), Lin Harumi, Osawa Shiho, Yamasaki Noriko (ketiganya nurse), Kato Ayomi (Farmasi), Tabuchi Shunji dan Kibe Yoshimici (keduanya paramedis) serta Ichihara Masayuki (kordinator).

Wapemred Ali Soekardi menyatakan, adalah suatu pekerjaan yang mulia, karena tim ini ambil

bagian dalam kegiatan kemanusiaan di Pulau Nias dan pekerjaan ini sangat dihargai oleh berbagai pihak.

Didampingi Sekretaris Redaksi, tim dari Jepang ini juga meninjau berbagai fasilitas ruangan redaksi.

Saat berpisah, War Djamil menyatakan kepada tim, apa yang dilakukan tim kesehatan dari Jepang ini, membuktikan hubungan antara bangsa dan negara Jepang dengan Indonesia, terus terjalin dengan penuh akrab. Ini perlu ditingkatkan melalui berbagai kegiatan lainnya (red)

国際緊急援助隊 1次隊が帰国

猛暑と闘い1078人診察

孤島ニアスで負傷者治療

ニアス島沖地震から三日目の先月三十一日にニアス県真都のグナンシトリ入りし、緊急医療活動を行ってきた日本の国際緊急援助隊・医療チーム第一次隊の十一人が十一日、十一日間の活動を終え、同日夜の便で帰国した。電気が通じず物資も不足する中、民家の大部屋で雑魚寝し、猛暑と闘いながら診察した被災者は千七十八人。帰国途中の十一日夕、スカルノハッタ国際空港で青山滋弥団長（外務省アジア太平洋局南東アジア二課課長補佐）、独立行政法人・国立病院機構災害医療班の大夫康裕医師らに活動の様子やニアス島の現状について聞いた。

（水嶋真人）

三十一日、メダン発のヘリで医療機材約三・三トントンともにグナンシトリ市内のサッカー場に降り立った隊員らは、市内中心部の二

久・外科医によると、病院の床は足の踏み場もないほどの患者であふれている状態。病院長も不在で病院としての機能を果たしていません。

庄古医師は「がれきで頭部を負傷したり、手足を骨折している患者、傷の中に土砂が入り化膿している患者たちを消毒し、小手術や点滴を次々と行いました。医薬品が足りずガーゼをアルコールで消毒しながら使わざるを得ませんでした」と語った。

二日、県知事公邸裏手に医療テントが完成、同日は七十八人の患者を診察した。大夫医師によると、初期診療が十分でなく、傷口が感染し、患部を切り取らねばならない患者、野外での生活が続く肺炎など呼吸器

医療テント前でヌルディン北スマトラ州知事（後列中央）記念撮影する隊員



や皮膚の感染症、相次ぐ余震に伴う睡眠不足で動悸、頭痛、めまいを訴える患者を一日平均で百五十人診察。午前八時半の診察前にはすでに六十人の予約者がおり、午後の診察開始時にもテントの前には患者たちの列ができた。

後半になると、下痢や脱水症状を訴える五歳以下の子供たちが増えたという。長引く避難生活、食糧などの物資不足、相次ぐ余震が子供たちの健康状態を圧迫しているようだ。

スーダン、イラン、コロンビアでも活動経験がある大夫医師は「正直、今回が一番大変だった。一人でも倒れたら活動全体が崩れるような危機感があった。全員、よく頑張りました」と語った。

香日向クリニック（埼玉県幸手市）で看護師を務める林晴美さんは「テントの中の気温は四十度、湿度は八〇％に達し、暑くて点滴が付けにくくなった。シートを破いてガーゼ代わりにしたり、ニアス語しか話せない患者も多かったため、二人の通訳を付けて症状を聞くこともありました」と困難な状況の中での医療活動を振り返った。

十日には、外務省経済協力局国際緊急援助室首席事務官の望月寿信氏を団長とする医療チーム第二次隊が業務を引き継ぎ、十五人体制で活動を行っている。

昨年十二月のスマトラ沖

地震で被災したバンダアチエでの活動に続き二度目の団長を務めた青山さんは、今後の支援活動について「医療活動は継続していく必要がある。亀裂が走り、でこぼことなった道路、一機しか動いていない発電所など、今後、ニアス島のインフラ整備も必要となってくるだろう。州対策本部の関係者は援助物資をめぐって不正が行われないよう神経を使っている。不正があったらインドネシアの恥だ」という役人の声をあちこちで聞いた」と語った。

スメル火山が活発化 入山も規制

火山・地震災害対策研究所はこのほど、東ジャワ州のスメル山（標高三六七六メートル）の活動レベルをレベル二（ワスパダ）に引き上げた。

地元紙によると、スメル山は噴煙を数百メートルの高さに吹き上げる噴火を繰り返しているほか、一日四十から百二十回の火山性地震が発生している。

このため、同山は標高三千四百メートルよりも上への入山が禁止された。

今年中ごろモール完成

ポンドックインダ2 南ジャカルタのショッピングモール「モール・ポンドックインダ2」の建設工事を行うメトロポリタン・クンチャナ社はこのほど、工事が今年の中ごろに

【日比国際院（JFC）の人数は明らかに不足しているが、NGOなどによると、少なくとも数万人はいるといわれる。しかし、父親捜しなどを支援している「JFC」を支えるネットワーク（東京都千代田区）によると、これまで扱った約700件のうち6割が非婚で、ほとんどは日本人男性とフィリピン女性の関係は破局しているという。

このため、スタッフの高野美央さんは「判決は評価できる。でも、共同は回復を待ち、事情を聴いた。犯行について具体的な供述はしていないが、調べでは、同容疑者が火災直後に放火をほめめかす発言を周囲にしていたことが明らかにあったという。

同容疑者が2人の子供と一緒に寝ていたとみられる1階南側の部屋の燃え方が激しく、屋内からは油の反応が出たとい、県警は逮捕に踏み切った。

【ワシントン＝村山知博】1950年代に世界的に流行した危険なインフルエンザウイルスが、米パイオ企業

50年前の危険ウイルス17カ国へ

米の企業誤送

保健機関（WHO）は「大流行の引き金になりかねない」としてウイルスを廃棄するよう呼びかけている。このウイルスは、57・58年が大流行した「アジア風2N2」型が送られた。受け

が入った。このウイルスの流行は68年が最後で、それ以降に生まれた人には免疫がない。流出すれば、死者が続出する恐れは強い。WHOなどはサンプルを確実に廃棄するよう呼びかけている。



【バンダアチエ（インドネシア・スマトラ島）藤谷健】先月28日のスマトラ島沖地震で最も被害の大きかったニアス島で12日、肺炎で危篤状態だった生後2カ月の女児が、日本の国際緊急援助隊の医師らによる救命措置

危篤の赤ちゃん 日米命のレニアス島

置と米海軍病院船での集中治療による「日米連携」で一命を取り留めた。写真、国際協力機構提供。援助隊の話では、12日午前10時ごろ、バレンティスちゃんが母親に抱きかかえられ、援助隊の

野外診療所に運ばれてきた。診察した朝日茂樹医師（弘前大医学部助教）によると、バレンティスちゃんの呼吸は不規則で、顔にチアノーゼが現れており、重篤な状態だった。呼吸障害の原因となっていたたんを吸い出すと、それまで真っ青だった顔が赤みを帯びてきたという。その後、米軍のヘリコプターで米海軍病院船に搬送。米軍側から13日午前、生命の危機は脱したとの連絡があった。

東京地裁では12日にも、結婚していないフィリピン女性と日本人男性の間に生まれた子9人が日本国籍の確認を求め

る訴訟を起こした。この際、母親の一人は「子供は生まれたのも日本で、学校も何も全部日本。今はまだ小さいが、成長してから子供に『自分の国籍は何』と聞かれたら、どう説明したらいいのか」と訴えていた。

一家不法滞在の外国人に特例として滞在を認める

「在留特別許可」を求めたが認められず、強制退去処分となった長野県佐久市のフィリピン人一家6人が処分の取り消しを求めた訴訟の控訴審判決が13日、東京高裁であった。赤塚信雄裁判長は、日本で生まれ育った長女（16）については処分の取り消しを認めた一審判決を破棄し、6人全員に強制退去を命じる判決を言い渡した。

高裁、一審判決を破棄

一家は03年5月、退去強制令書を発付された。茨城県の入管施設に収容されている父親（46）以外は仮放免中で、佐久市内に住んでいる。

判決で赤塚裁判長は県立高校2年の長女について「長女が日本で示した生活ぶりなどを考えると、帰国した際の困難を乗り越えるのも十分可能だ」と判断した。

原告代理人の児玉晃一弁護士は「日本で生まれ育ち、一度もフィリピンに行っていない長女の将来に対してあまりに無責任な判決だ。上告も検討する」と話した。

等放火未遂罪で起訴した無職石井誠容疑者（68）は同市旭町4丁目IIが、金を奪う目的で2人を殺傷した疑いが強まったとして、強盗殺人と同未遂の容疑で再逮捕した。

調べでは、3月23日昼ごろ、柏市篠籠田の無職飯豊千栄子さん（76）方に押し入り、家政婦の阿蘇としえさん（61）の首を絞めて殺害。さらに飯豊さんも絞殺しようとした疑い。飯豊さんは押し倒された際に肋骨が折れる大けがをした。

プルが送付された施設が東京都や京都府、福岡県など5都府県の9カ所にのぼると発表された。同省によると、サンプルはいずれも廃棄か冷蔵・冷凍保存されており、保存されているものは15日までに処分するよう

強盗殺人容疑 68歳を再逮捕 千葉・柏の2人殺傷

「ロイヤル」創業者 江頭 匡一さん（えがしら・きょういち）ロイヤル創業者相談役）13日、肺炎で死去、82歳。通夜は14日午後6時、葬儀は15日正午から福岡市中央区古小島町70の1の積善社福岡斎場。喪主は妻憲子（のりこ）さん。お別れの会は25日午前11時午後2時、同市博多区住吉1の2の82のグラウンド・ハイアット福岡で。連絡先は同社広報室（03・5707・8852）。

息もつかせぬ推理サスペンスの傑作
6月3日①-26日②公演分 4月17日③前売開始!

浜離宮朝日ホール (大江戸線築地市場駅A2出口すぐ)
ピアノの2大巨匠 ◆ 浜離宮朝日ホールに登場!!
オlli・ムストネン

あなた
情報E→ shakail
FAX 03-35
写真E→ photo6

インドネシア・ニアス島の診療所で緊急治療を受けるバレンティヌスちゃん（手前）。途絶えかけた小さな命が日本人の手で救われた（JICA提供）



JICA医療チーム 懸命の人工呼吸

たい

グ要請

教師は振り返る。
少女たちは「主言教師の言葉が世の言葉」と教え込まれた。金銭難者「メイン」コントロールされていく。このため、地上教師は教

肺炎の乳児 命救った

地震被災地 インドネシア・ニアス島

先月28日の大規模地震で壊滅的な被害を受けたインドネシア・スマトラ島沖のニアス島で、地震発生直後から活動を続けている「国際協力機構（JICA）国際緊急援助隊」医療チームが、現地被災地にて肺炎で瀕死状態だった生後2か月女の子の命を救った。ニアス島に停泊する米海軍の病院船に乗り、緊急搬送す

重度の肺炎で意識がほとんどなかったため、医療チームは米海軍の病院船にへの出動を要請。到着までの約30分間、弘前大助教授の朝日茂樹医師らスタッフの細い血管を探り当てて点滴を施す。呼吸器を吸引するなどして緊急措置。青かったバレンティヌスちゃんの顔はまもなく赤みを帯び始め、無事、病院船に収容された。現在、快方に向かいつつあるという。

JICAは、インド洋大津波発生後の昨年未からインドネシア・バンダアチェなど周辺4か国に医療スタッフを派遣。ニアス島での地震でも先月30日から医療チームが現地入りし、1日150人以上の被災者の治療にあたっている。浅野寿夫・JICA国際緊急援助隊事務局長は「医薬品や医療設備が乏しい中、献身的な治療が実を結んだ明のいニュース。今後現地医療に貢献していきたい」と話している。

ドアノブ付近がくりぬかれ、カギが開いているのを警備員が発見し、同署に通報していた。

沼本容疑者は「午後7時半の閉店間際に板をくりぬき、先にカギを開けておいた」と供述。未明になってドアを開け、ベニヤ板を電動ノコギリで切り取り侵入した。

沼本容疑者は1999年に開業。小・中学校の校医も務め評判もよかったという。14日は休診日だった。

地中から 2500万発見

川崎の工事現場 14日午前8時35分ごろ、川崎市中原区新城2のマンション建設工事現場で、重機で土を掘り返していた建設作業員3人が、深さ約50センチの地中から1万円札約2500枚が入った袋を発見。現場監督者が100番した。

中原署によると、旧1万円札で、輪ゴムで約1000枚の束の状態で発見

第1 報

2005年03月29日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助

インドネシア・スマトラ沖で発生した地震災害に対し、下記のとおり国際緊急援助を実施することとなりましたので報告します。

記

1 災害状況

3月29日未明にスマトラ島沖で発生した大規模地震により、北スマトラ州のニアス島を中心に大きな被害が発生しています。

2 わが国の対応

被害の大きさに鑑み、総額約1500万円相当の緊急援助物資(テント、毛布、発電機、スリーピングマット)の供与及び11名からなる医療チームの派遣を決定しました。

医療チームは30日に日本を出発予定です。

3 インドネシア国政府の対応

現地に担当閣僚を派遣するとともに、緊急医療チームの派遣、緊急援助物資の輸送などにあたっています。また、同時に国際社会に対して支援を要請しました。

以上

[↑ JICAサイトトップへ](#)[ページの先頭へ ↑](#)
[【サイトポリシー】](#)
[【プライバシーポリシー】](#)
[【情報公開】](#)

All Rights Reserved, Copyright(c)1995 Japan International Cooperation Agency.

[世界の現状を知る](#)[国際協力に参加する](#)[JICA早わかり](#)[みんなで学ぼう](#)
[ホーム](#) > [JICA INFO-Site](#) > [事業別取り組み](#) > [国際緊急援助](#) > [詳細情報](#) > [国際緊急援助隊ニュースリリース](#) > [2005年の活動一覧](#)

第2報

2005年04月03日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム活動報告)

現地に派遣されています医療チームの活動状況について報告します。
 医療チームは全員、被害の大きいニアス島に入り、診療活動を開始しています。



成田空港を出発する医療チーム



ジャカルタ経由でメダンに向かう



グングシトリ市の被災状況



日本から供与されたテント



メダンからニアス島に向かう 1



メダンからニアス島に向かう 2



メダンからニアス島に向かう 3



メダンからニアス島に向かう 4

[世界の現状を知る](#)[国際協力に参加する](#)[JICA早わかり](#)[みんなで学ぼう](#)
[ホーム](#) > [JICA INFO-Site](#) > [事業別取り組み](#) > [国際緊急援助](#) > [詳細情報](#) > [国際緊急援助隊ニュースリリース](#) > [2005年の活動一覧](#)

第3報

2005年04月04日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム活動報告2)

現地に派遣されています医療チームの活動状況について報告します。

ニアス島到着後、診療所設営までの様子です。



グヌングシトリ 上空



被災状況



被災状況



ニアス島に到着した日本の供与物資



診療所サイトに移動する医療チーム



診療所の設営



診療所全景



診療所の前で

2005年04月04日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム活動報告3)

現地に派遣されています医療チームの活動状況について報告します。
ニアス島での医療チームの診療活動の様子です。



受付



待合室



診療風景1



診療風景2



診療風景3



薬局

2005年04月06日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム2次隊の派遣)

標記に関し、下記のとおり国際緊急援助隊医療チーム第2次隊を派遣することとなりましたので報告します。

記

1 災害状況・わが国の対応

3月29日にインドネシアのスマトラ島沖で発生した地震の被害は同国に甚大な被害を与えており、死者は500人以上、家屋損壊も広範囲に渡っています。

現在国際緊急援助隊医療チームがニアス島に派遣されていますが、医療ニーズが依然として高いことから、医療チーム第2次隊(医師3名、看護師4名、薬剤師1名他)を派遣することを決定しました。

2 医療チーム第2次隊の動き

医療チーム第2次隊は7日と9日に分かれて日本を出発します。現地ではすでに派遣されています医療チームからの引継ぎを受け、診療活動を開始する予定です。

以上

2005年04月07日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム活動報告4)

現地に派遣されています医療チームの活動状況について報告します。

ニアス島での医療チームの診療活動の続報です。医療チームは連日100名を超える患者の診療にあたっています。



診療の様子



夜の宿舎での団内ミーティング



地元病院で使われている国際緊急援助隊のテント1



地元病院で使われている国際緊急援助隊のテント2

[世界の現状を知る](#)[国際協力に参加する](#)[JICA早わかり](#)[みんなで学ぼう](#)

[ホーム](#) > [JICA INFO-Site](#) > [事業別取り組み](#) > [国際緊急援助](#) > [詳細情報](#) > [国際緊急援助隊ニュースリリース](#) > [2005年の活動一覧](#)

第7報

2005年04月11日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助（医療チーム活動報告5）

現地に派遣されています医療チームの活動状況について報告します。

7日と9日に出発した医療チーム第2次隊もニアス島に到着し、すでに派遣されていた1次隊からの引継ぎを受け、引き続き診療にあたっています。



医療チーム2次隊がニアス島に到着1



医療チーム2次隊がニアス島に到着2



2次隊メンバーが診療を開始する



2次隊メンバーが診療を開始する



グヌングシトリ市内の市場の様子

[↑ JICAサイトトップへ](#)[ページの先頭へ ↑](#)

[【サイトポリシー】](#) [【プライバシーポリシー】](#) [【情報公開】](#)

All Rights Reserved, Copyright(c)1995 Japan International Cooperation Agency.

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム活動報告6)

記

緊急援助隊医療チーム 瀕死の赤ちゃんを救う ～米海軍との連携で～

インドネシア・スマトラ島沖地震(3月29日発生)で、国際協力機構(JICA)が派遣した国際緊急援助隊医療チームが12日(火)、米海軍と連携して、肺炎で瀕死状態にあった赤ちゃんの一命をとりとめた。

12日午前10時半、両親がぐったりとした生後2ヶ月のバレンティヌスちゃんを抱えて、医療チームの診療所に駆け込んできた。診察した朝日茂樹医師(弘前大学医学部助教授)によると、重症肺炎を起こし、呼吸はほとんどなく、瀕死の状態だったという。

チームは直ちに、ニアス島沖で救急診療を行う米海軍病院船への搬送を、米軍に要請するとともに、搬送ヘリが到着するまでの30分間、懸命の救命活動を行った。川谷陽子看護師(愛知医科大学付属病院)が、赤ちゃんの細い血管に何とか点滴針を刺した。喉につまっていた痰を吸引して、人工呼吸を続けた。

ヘリが到着すると、朝日医師が赤ちゃんを抱え、マウス・ツー・マウスをしながらヘリに乗り込み、病院船に向かった。病院船での治療で、危険な状態は脱したという。

朝日医師は、バレンティヌスちゃんが重症肺炎を引き起こした原因について、「地震後の不良な住環境が影響したのではないかと話す。「あの子は、あのまま放っておけば20分で死んでいただろう。私たちが応急手当を行い、米海軍が次のレベルの処置をし、連携した救命救急活動ができた」

バレンティヌスちゃんは現在、安定し快方に向かっているとのこと。生まれて間もない小さな命が、日米の連携で救われた。両親は喜び、医療チームに「ありがとう」と感謝の言葉を伝えたという。



搬送ヘリを待つ30分間 懸命の救命活動(1)



搬送ヘリを待つ30分間 懸命の救命活動(2)



搬送ヘリが到着 人工呼吸をしながら赤ちゃんを抱えてヘリに乗り込む朝日医師



ヘリへと向かう朝日医師

第9報

2005年04月13日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム1次隊の帰国)

2週間にわたる現地での活動を終えた1次隊隊員(10名)が4月12日7:55成田空港に到着、空港特別待合室にて行われた解団式をもって全ての任務を終了しました。なお、1次隊が立ち上げた診療所においては、4月7日(木)および9日(土)から派遣されている2次隊隊員(17名)が診療活動を継続しています。

記

1次隊の活動概要

3月30日(水)11:25に成田空港を出発した医療チーム1次隊は、ジャカルタでの乗り継ぎを経て、翌31日(木)の00:55、インドネシア北スマトラ州の州都メダンに到着。メダンからは、チャーターしたヘリコプターと国軍の飛行機を利用して、4月1日(金)および2日(土)に分けてニアス島に入りました。

4月2日(土)には隊員5名(医師2名、看護師2名、薬剤師1名)が現地の総合病院のER(救急救命室)のサポートに入る形で、17名の患者の診療活動を行いました。また3日(日)から9日(土)の間は、知事公邸前広場に開設したJDR医療チームの診療所にて、1日平均約150名の患者に対して医療サービスを提供しました。活動期間を通じて外傷患者の割合は患者全体の2割弱でしたが、重篤者はずいぶん減ってきました。

一連の活動を終了した10日(日)、1次隊の団長が州政府官房長官、県知事、保健省、WHOを訪問し、1次隊の活動報告書を提出しました。州知事に対しては知事の宿舎を訪れて直接手渡しましたが、その際、日本チームの奮闘に対し知事から感謝の意が伝えられるとともに知事として喜んでくれるとのメッセージをいただきました。

1次隊活動のトピックス

- ・ JDR医療チームが診療所を開設した知事公邸前広場はグヌンシトリ市内でも大変目立つところであり、診療所は援助のシンボリックな存在となっていました。このため多くの援助関係者がJDRの診療所を訪れました。
- ・ グヌンシトリ市内には宿泊施設がほとんど無く、当初はテントを張っての野営も覚悟しました。そんな中現地のNGOを通じて民家のひとつがチームの宿泊所として提供されました。これは厳しい環境の中で活動を行うチームにとって大きな助けとなりました。
- ・ 4月4日(月)には、過酷な状況下の活動で疲労困ぱいしたメキシコのレスキュー隊員がJDR医療チームの診療所に運び込まれるということがありました。点滴を受けて回復したレスキュー隊員は、また現場へと戻って行きました。

現地の復旧への取組みと状況

グヌンシトリ市内の商店が徐々に開店し、店先には野菜や果物などが並べられるようになってきました。また、街灯が点灯されるエリアも広がりつつあり、町のいたるところで給水管の工事などが進められています。

州政府からは、緊急期と位置づけた地震発生から4週間を目処に公共サービスを復活させたいとの発表がなされており、いよいよ復旧の本格的な段階に入る模様です。



解団式にて活動を報告する青山団長

以上

[↑ JICAサイトトップへ](#)

[ページの先頭へ ↑](#)

[【サイトポリシー】](#) [【プライバシーポリシー】](#) [【情報公開】](#)

All Rights Reserved, Copyright(c)1995 Japan International Cooperation Agency.

第10報

2005年04月18日

インドネシア・スマトラ沖地震災害に対する国際緊急援助(医療チーム2次隊の帰国)

1次隊から引き継ぐ形で被災地への医療サービスを提供してきた2次隊隊員(17名)が、活動を終え、4月18日6:35成田空港に到着、空港特別待合室にて行われた解団式をもって全ての任務を終了しました。

記

2次隊の活動概要

4月7日(木)に成田空港を出発した2次隊第1陣(5名)は、ジャカルタでの乗り継ぎを経て、同日メダンに到着。8日(金)2名の業務調整員を後方支援のためメダンに残し、3名はチャーターした飛行機にてニアス島に入りました。3名は8日(金)と9日(土)の2日間、引継ぎを兼ねて1次隊メンバーとともに診療活動を行い、また後方病院の視察を行いました。

9日(土)に成田空港を出発した2次隊第2陣(11名)は、ジャカルタでの乗り継ぎを経て同日メダンに到着。チャーターした飛行機にて、10日(日)ニアス島に入りました。

11日(月)から15日(金)の間は、1日平均約160名の患者に対して医療サービスを提供しました。日本チームの評判を聞きつけて、遠方からも患者が訪れるようになり、重篤者が担ぎこまれることもありました。

2次隊活動のトピックス

- ・重症患者の後方医療船期間への搬送を行いました。うち3件は、JDR診療所から米海軍病院船へのヘリによる搬送を日米連携で実施しました。
- ・(1次隊、2次隊を通じて)グヌンシトリ市内には宿泊施設がほとんど無く、活動開始当初はテントを張っての野営も考えられましたが、民家のひとつをチームの宿泊所として、現地のNGOを通じて提供いただきました。厳しい環境の中で活動を行うチームにとって大きな助けとなりました。15日(金)の夜、宿舎で行われた最後のチーム反省会では、宿舎として民家を提供して下さった一家のお母さんから、「この家は皆さんのためにいつでも開けている。またいつでも来て欲しい」、お父さんからは「この家をJICAハウスと呼びたい」との言葉をいただきました。

被災状況のまとめ (Field Situation Report No.5 (UN Office of the Humanitarian Coordinator for Indonesia)による)

- ・ニアス島での死者数は530名(4月4日現在)。
- ・シムル島の住民78,000名のうち90%が屋外生活(シェルターを含む)を送っている。

我が国の対応のまとめ

- ・医療チームの派遣
 - 3月30日～4月12日(1次隊11名)
 - 4月7日～4月18日(2次隊17名)
 派遣期間を通じて、合計1,953名(延べ)の診療を実施
- ・物資供与
 - テント、毛布、発電機、スリーピングマット等、1,500万円相当

以上